

綴葉

てい
よう

'25 10

No. 441

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

宮島未奈著『それいけ！平安部』

阿部幸大著『ナラティヴの被害学』

特集／京大作家インタビュー（第五弾：宮島未奈）

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

 seikyo.univ. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

いとをかし！ 個性あふれる平安部、爆誕！

それいけ！平安部

宮島未奈著
小学館



「あないみじ……これ、運命の出会いだよ」

高校入学初日、牧原^{まきはら}菜は腰まで伸ばした黒髪に赤い和傘を持つ、ちょっと変わった生徒に声をかけられ、一緒に「平安の心を学ぶ」部活を作ることになる。元サッカー部のアルバイターに、百人一首部の幽霊部員、学校一のイケメンまで、個性豊かな部員を集めて、めでたく平安部誕生！目指すは文化祭！しかしここで問題が。

——平安部って、何やるの？

大人気『成瀬は天下を取りにいく』シリーズ作者の注目の新作は部活動をめぐる青春小説。『好き』のエネルギーで猪突猛進！な部長にして発起人・平尾安^{ひらおやす}以加^{いかに}と、そんな彼女に手を引かれて立ち上げに参加した自称「一番地味」な菜の関係性は、どこか『成瀬』シリーズの主人公・成瀬あかりとその相方・島崎みゆきを思わせる。けれど中学から大学まで、膳所を縦横無尽に駆け回る成瀬とはちがって、本作は県立菅原高校を中心に、入学式から文化祭までのありふれた、けれどかけがえのない一日一日を着実に積み上げる。それは得体の知れない平安部が、部員全員の居場所になるまでの軌跡だ。

◆5人の個性が形作る平安部

平安部の行く先には、部活モノにありがちな挫折、仲間割れ……といった、胃のキリキリする展開はない。トラブルや悩みは、登場人物たちがもともと持っていたものを組み合わせることで鮮やかに解消されていく。まるで蔵の中で静かに眠っていた宝物が陽の目を浴びるように、平安部の活動をとおして部員の個性が輝きます。たとえば元サッカー部の補欠選手だがリフティングだけは得意だったという大日向大貴^{おほむけなただいき}は、蹴鞠で思わぬ才覚をあらわす。文化祭に向けた実績作りに悩む平安部は、大貴の主導で京都の蹴鞠大会へ赴くことになる。パズルのピースがはまるように、平安部が形作られていく——本作は、平安部をやるのではなく、平安部になる話なのだ。

そうしてできたあがった5人の「平安」は、厳密な考証に基づいた歴史とはちがっているかもしれない。もともとは天体や宇宙が好きな理系の菜は「歴史なんて、本当にあったのかどうかわからない昔のことを暗記するしかなくて、全然面白いと思えなかった」と言う。けれど安以加と出会って考えが変わる。「歴史はあくまで残っている史料に基づいたフィクションなのだ」と。部員の光吉幸太郎^{みつよしこうたろう}も、平安部の活動をこう語る。「平安時代に意識を向けることで、令和を生きる自分たちの心を知る。そんな部なのかもしれません」。

もし、本作や『成瀬』シリーズを読んで「そんなにうまくいくかな？」と首を傾げたことのある読者は、特集の作家インタビューをご覧ください。作者がフィクションに込めた思いの一端が覗けるはずだ。

(くたくた)

(二五六頁 税込一七六〇円 4月刊)

阿部幸大の「診断」——『ナラティブの被害学』を読む

ナラティブの被害学

阿部幸大著
文学通信



阿部による前著『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』は、アーギュメント（主張）の証明が論文の意義であるという主張のもと、論文の書き方について解説していた。本書はその実践編だ。阿部が目標とするのは、帯にもあるとおり「加害性の再分配」、つまり、加害／被害の二分法を再検討して自らの加害性に目を向けることである。しかし、「加害性の再分配」という阿部の目標は分断の進む社会にとって間違いない望ましいものである一方で、ときに奇妙なふるまいを引き起こしてしまう。

それはたとえば第五章、ヴァージニア・ウルフの『ダロウエイ夫人』を扱う論文に現れる。論の展開などは各自確認してもらうことにして（WEBでも読める）、アーギュメントを引いてみよう。阿部は、結末近くでウルフがエビファニーを導入して「リアリズムから離反する」のは、「女性のヒステリーと男性のシェル・ショックとの連帯の可能性を分断するメディコポリティカルな暴力に支配されていた当時の社会構造」（舞台は第一次戦後のイギリスだ）にあって、「二人」評者・クラリッサとセプティマス」を隔絶する社会的・文化的バリアを超える」ためだ、と主張する。

これを証明するにあたって阿部は、クラリッサが「まさしく当時

「女性ヒステリー」の典型的な症状として知られていた神経過敏に悩まされている人物として造形されている」という。この断言を支えるものとして挙げられるクラリッサの症状は、彼女が妹の死を目撃したことで「暗くなってしまう」（作品より）という第三者の推測、死の可能性に対する「恒常的な感覚」（作品より）、そして「多幸的に生を言祝ぐ」こともその一端に含む「極端な気分の変れ」（阿部）だが、いずれも論文冒頭に引用されていたシェル・ショックとヒステリーに共通する症状（無言症、視力、聴力障害、四肢の痙攣やふるえ、無感覚、ノイローゼ、不眠症、そして恐ろしい悪夢を繰り返す）には妥当していないし、また、他の箇所においては引用と注が多用されているにも関わらず、当時ヒステリーと診断されていた症状の記述が引用されることもない。よって、クラリッサがヒステリーであるという診断、ひいてはセプティマスのエル・ショック／クラリッサヒステリーという、この論文の根幹をなす対称性は、論文内で検証可能な形で示されることがない。

この対称性が崩れるならばアーギュメントもまた崩れる。逆説的にいうならば（しかしこの逆説はアーギュメント主導の論文構成から不可避に演繹されるものだ）論文が成立するためには、クラリッサはヒステリーでなくてはならないのだ。論証を省略して診断を下すとき、全体のために一点を犠牲にするその姿は家父長的な大英帝国の身振りを反復しているときえいえる。とはいえむろん、こうして「加害性の再分配」を行うとき、評者が阿部に負うところ多大であることは、いうまでもない。

（コーク）

（三三六頁 税込二四二〇円 4月刊）

〈特集〉京大作家インタビュー



すっかり『綴葉』毎年恒例企画となりました、京大作家インタビュー！ 第五弾となる今回は、いま最も勢いのある小説家・宮島未奈さんにお話を伺いました。

宮島さんは1983年静岡県出身、京都大学文学部を卒業されています。変わり者だけれど真っ直ぐな芯のある少女・成瀬あかりを主人公とする『成瀬は天下を取りに行く』で単著デビュー。同作は続篇の『成瀬は信じた道をいく』と合わせて人気シリーズであり、滋賀から京都へと舞台を移した大学編『成瀬は都を駆け抜ける』も刊行予定。今回はそんな〈成瀬〉シリーズのお話を中心に、『婚活マエストロ』や新刊『それいけ！平安部』にも通じる先生の創作スタイルについて、お訊きしてきました。

——本日はよろしくお願いします。さて、宮島先生は京都大学の文学部出身とのことですが、学生時代はどのようなことを研究されていたのでしょうか。

文学部に入ったのは、もともと作家になりたかったから。当時は今みたいにSNSとかないから、作家がどういう経歴をたどっているのかっていう情報が得られなくて、作家になるには文学部がいいのかなって、そういう単純な動機から文学部を志したわけですね。文学部に入ってから、哲学系に行って、その中でも日本哲学史専修にいました。卒論のテーマは福沢諭吉です。『学問のすゝめ』が有名なんだけど、ほかにも『分権論』というのがある。地方分権の分権で、中央の政権と地方の政権でガバメントとアドミニストレーションを区別して論じているんです。それが良いなと思って、福沢諭吉と地方自治というようなところで書きました。

——文系的な方向に行くっていうのも、作家になるというところが最初にあった。

そうですね。高校時代はそれで文系には行っただけで、数学がいちばん得意でした。数学が得意だから京大入れたって私はよく言うんです（笑）。文学部の人は数学苦手な人が多いので、数学で差がつくんですよ。

——数学がお得意とのことですが、〈成瀬〉

シリーズで成瀬は京大理学部に進学しますよね。『それいけ！平安部』でも語り手の牧原菜は自身は理系であるって言っていたり。

無意識ですが、そういう理系的なところは意識していたかもしれないですね。成瀬が理学部なのは、理学部っぽいからです。北部キャンパスにいいような感じ。北部だけ、ちょっと特別にきれいな感じじゃないですか（笑）。ちゃんと道路が整備されている。北部好きなんですよね、私。



——『小説新潮』に掲載されている〈成瀬〉シリーズの短篇「やすらぎハムエッグ」「実家が北白川」「ほきののこ」は京大が舞台になっているわけですが、京都の生活が作品に影響を与えている部分はあるでしょうか。

成瀬が京大っていうのは単純に、私が京大しかよく知らないからです。京大が良かったとか悪かったとかいうようなジャッジとはまた別に、やっぱり自分が行ったことがあるから書きやすいかなと思って。膳所から通ってる子もいたから、現実的かなど。そういう意味ですごく影響を受けてるけれども、私が東大出身だったら多分東大にしようし、あんまり深い意味はないかもしれない。

——「実家が北白川」では京大作家の森見登美彦さんが取り上げられていますね。森見作品に憧れる大学生たちが登場します。

森見さんは憧れですね。でも私がよく言っているのは、森見さんがデビューした二〇〇三年は、私は二回生だったんです。今の子どもたちってみんな森見さんに少なからず影響を受けて京大を目指していると思うのだけれど、私はそれと関係なく入った最後の世代だと思ってるんです。登美彦以前／以降みたいな。

「実家が北白川」は森見さんの世界をお借りするのはどうかと思って書いてたんです。最初は地の文も森見さんっぽく書いてたんだけど、これはさすがにオマージュが過ぎるというところで、成瀬らしさ、私の作風らしさをどうしたら出せるかと苦労しました。森見さんの世界だったら桃鉄とかやらない（笑）。

《地方都市のために／フィクションの膳所》

——《成瀬》シリーズの舞台が京都に移ったことで、作品に変化はありましたか。

地続きな感じで、あまり変わってないですね。左京区って大津と隣接してるので本当にちょっと外に出たくらいの感覚なんです。新しい環境で京大生と交流を始めて、世界が広がっているんだけれど、そこまで書き方を変えてるわけではないです。

あと、京都をあんまり美化したくないなと思っていて。滋賀に關してもそうなんですけど。京都がフィクションの世界ですごく美しく描かれるけど、京都にいる人にとっては生活の場だし、京大もそこまで特別なことはい一つの大学であると考えているので、それをフラットに書けたらと意識してます。

——宮島先生の作品には膳所、京都、浜松などご自身に縁のある土地が登場しますが、作品の舞台はどのように決めていますか。

《成瀬》シリーズはもろに住んでるところでと思って書きました。コロナ禍であまり外に出られなかったから意識が内向きになってたのと、書きやすいので。でもそれがうまくいったなと思います。京都じゃなくて、あまり書かれていない大津から始めたのはすごく意義深いことだったなと思いますね。

『婚活マエストロ』の浜松は、実は最初からは考えていなくて、後から見つけました。作中にびわ湖のミシガンクルーズを出すことになったので、日帰りでできるちょうどいい距離を探った結果です。名古屋とかでもよかったんだけど、地方都市の方がいいかなって。

『それいけ！ 平安部』は架空の、汎用性の高い地方都市として書いてます。地方鉄道とかイオンはわりとこの地方都市にもあるし、具体的なところを定めるよりは、読者に自由

に感じてもらうといいかなって。

地方都市にしているのはわざとではないんだけど、私自身がそういう地方都市の出身で、今住んでるところもそうなので、書きやすいのかなと思います。読者もそういうところに住んでいる人たちが多いと思う。都会を舞台にした小説は他にもいっぱいあるから、だったら私はそこを書く必要はないかなって。

——卒論のテーマも地方自治論でしたね。地方自治に関心はあったのかも知れない。自分が地方に住んでいたから地方にできることってどうか。浜松の書店さんでも『婚活マエストロ』を応援してくださったので、そういう意味では、舞台を浜松に定めたのは良かったなって思ってます。

——《成瀬》シリーズでは「ときめき小学校」など、実在の場所から名前が変わっている場所が登場します。どういう意図があるのでしょうか。

私が書いてるのは確かに膳所さんだけど、フィクションの膳所として考えた舞台なんです。よね。こっちの世界とあっちの世界は別物っていう意識を強く持つてる。《成瀬》は一種の歴史小説なんです。二〇二〇年八月末の西武大津店の閉店は事実なんですけど、テレビ中継は嘘だし、成瀬とか島崎とかいう人物はいないし、嘘の世界にしなきゃいけない。

やっぱり小説はフィクションだから、現実の膳所と同じではなくて、舞台として借りてるっていう感覚ですね。

でも名前を変えるところは感覚で決めてます。「ときめき坂」は実在の地名なんだけど、それがすごいフィクションっぽくていいなと思って。だったら小学校の名前もときめき小にしうとか。全部変えてもわざわざしうになるので、変えるところと変えてないところが混在した状態にしてます。

『肯定』のフィクションを描く

——小説を書くにあたって、成瀬や平安部がどのようなものであるかというイメージは最初から固まっていたのでしょうか？

最初から書きたいものが決まっていたわけではないですね。応募原稿として書いた「ありがとう西武大津店」は設計図が決まっていたんですが、他の作品に関しては、どうい話にしていくかは未知数というか、あんまり最後まで決めずに書き始めるので。でも最近ようやくプロットを書いたほうがいいってことに気づいて、「最後こんな感じにします」って決めてから書き始めます。だから書き方は最初のうちと比べたら変わってる。「成瀬は信じた道をいく」でも、最終回はみんなが集まって、みんなで成瀬を探す、みたいなのが

最初から決まっていた。そういう意味では、ちゃんと計画性ができてきたなって思います。でもやっぱり細部は、書きながら変わるんですよ。『平安部』でも、大枠は決めて書いてるんだけど、その途中で何があるかとは、一話ずつその時々で考えてました。

——『平安部』では、平安部で何をしようか模索しながら話が進んでいきますが、宮島先生が書きながら細かいところを探っていくのと、ある意味でバラレルんですね。

まさにそうですね。最初は平安部といっても何やるの、というような状態から始めたので。そもそもなんで平安部にしたかというところは『セクシーコマンドー』外伝、すごいよ!! マサルさん』っていう漫画が好きで、何か他にはない部活ものを書きたいっていうのがまずあったんです。この漫画はセクシーコマンドーっていう架空の格闘技を極めるセクシーコマンドー部の話なんですけど、結局やってることは五人がわちゃわちゃする話なんですよね。まさにそれをやりたくて。平安時代に特化した平安部とかあったら面白いんじゃない? というところから始めて、そこから何ができるかを考えた時に、みんなで蹴鞠とかやったら楽しいかなって思ったんです。だからまず平安部ありきで、平安部から何ができていくか、みたいなことを考えてやっていました。

——宮島先生の小説はキャラクターが魅力ですよ。登場人物に関して、意識していることはありますか？

すべての登場人物に敬意を持って書く、ということ。全員に人生があるので、一人一人が作品の駒みたいになってはいけない、この人たちはこういう人生がある中の一部を切り取られてここにいる、っていうことをすごく意識しているんですね。その人それぞれの人生があるので、雑な扱いをせずに一人一人ちゃんとその物語に出してもらおう。

あとは、誰が喋っているか、とかも含めてとにかくわかりやすく書く。成瀬の口調がちょっと変わってるのも結構技術的なことで。成瀬が喋ってるって一目でわかるから「成瀬が言った」って書かなくていいんです。「婚活マエストロ」でも、関西弁の子がいったり武士みたいな喋り方の子がいったり、喋り方で少し差別化を図る、ということとしてはしています。



——比喩表現なども、その人の頭の中から出てきたような等身大の表現だと感じます。比喩とかは自然に出てくるかな。たまに自分でも想像しなかったのがほんとに出てきたり

する。『婚活マエストロ』では阿部寛のホームページが出てくるんですが、あれも阿部寛のホームページが頭に浮かんだからそう書いたって感じですかね。古めかしいホームページの代表例としてハまるかなって。

あとはやっぱり、本人が知らないようなことは書かない。その人にあった比喩を書くようにはしてます。阿部寛のホームページもあれは四十歳男性の健ちゃんだから出てくる比喩であって、たとえば成瀬はそんなこと言わないじゃないですか。

——〈成瀬〉シリーズでも『平安部』でも、他者との関わりのなかで、それぞれの人物が自分を見つめ直し、自己を再発見するというテーマが一貫して書かれているように思いますが、それはご自身で意識されていますか？

平安部もまさにそうだなあ、平安時代に目を向けることで今の時代を生きている自分たちを知る、って作中でも言っていましたね。そういうふうには書くことが思っているわけではないんだけど、結果的にそうなるものもあって今思いました。

私の書く話は「肯定」の話だって、前に言われたんです。すごく肯定される話なんですよ。全肯定の話。困難も起こるんだけど、うまくいきます。『こんなにくまにくまいかないよ』って言われることがあるんですけど、

ど、フィクションだからいいじゃんって私は思っていて。さっきも言ったように、嘘の世界だから。嘘の世界では全部うまくいっちゃうんだよっていう、そういうのがあっていいと思ってる。

理想の世界ともまた違うけど、そういう全肯定される世界があってもいいじゃんって、そういうような気持ちで書いてます。

『京大生に向けて』

——いまの京大生におすすめしたい本がありましたら、お聞きしたいです。

三冊用意しました。まず森見登美彦さんの『夜は短し歩けよ乙女』。これを読んでおいてもらった方が私の次の作品、絶対楽しめると思うんです。今読むと結構古いんですけど、それでも京大生のエッセンスは通じていて、ここは一緒だな、ここは違っていて思いますが読んでいい。

次に、これもまさに京大生のうちに読んでほしいなっていうのが、万城目学さんの『鴨川ホルモー』。こっちもめちゃめちゃファンタジーで起こるはずないことが起こるんだけれど、こちらの方がわりと地に足ついてる。そういうところが、すごく好きですね。

で、これはいつも言っている、三浦しんさんの『風が強く吹いている』。大学生が箱

根駅伝を目指す話で、大学生たちのやり取りがとても良くて、最後はがっつり感動するし、夢中になって読める。

三冊とも私たち世代にとってはベタなんですよ。ベタだからこそ、今の大学生にとっては新しいかもしれないと思います。

——今の京大生にメッセージはありますか。いやー、ないですね（笑）。ないない。

基本的に、京大出身っていうのは言わないようにしています。もう卒業して二〇年も経っているから、ずっと京大って言うのもダサいかなって。森見さんや万城目さんとの関係だったら大学の先輩だから当然言うけれど、普段はほとんど言わないようにしています。

あとはまあ勉強です。私は大学時代もととやっぱよかったと思います。つまんないかもしれないけれど、でもやっぱりいっぱい本読んだり授業出たりするのっていいのは本当に今しかできないことだから。結局私もそれが礎になっていると思うので、勉強は絶対やっこといたほうがいい。

——成瀬自身も、これから京大で勉強をしていくことになりそうです。

そうですね。京大編の『成瀬は都を駆け抜ける』は二月一日に刊行となります。京大生の皆さんには特に読んでいただきたいです。

（くたくた・猫足・水炊き）

新刊コーナー

みえないもの

イリナ・グリゴレ著

柏書房



「例えば、当たり前のことだけ家で作るパンが買ったパンよりも早くカじるのを見ると少し嬉しい。果物も直売所で買ったものは足が早い。この表現もお気に入りだ。足が早いというのは果物と野菜が夜中、私が見てないときに動いているということなのだ」——イリナ・グリゴレの書く独特なリズムは、一作目の『優しい地獄』を読んだ三年前から心のどこかに残り続けていた。ルーミアに生まれ、人類学の大学院生として日本に来た彼女は、前作で自らの半生を描いた。その続きである本作では、映像人類学を教える研究者として、母としての日常がつづられる。生活の断片の描写がふと、ルーミアの光景やかつて触れた映画、文学、空想の世界へと飛んでいく。身体が掬われるような浮遊感は気持ちいい。でも今作はそれだけではない。

「この本では、弱者としての女性、みえないものとしての女性、彼女らの誰にも知られなかつたエピソードを、フィクションとノンフィクションの境界線をまたぎながら書いてみた」。こう説明しているように、後半では名もなき「彼女」たちが、自らの半生を独白する。結婚式、電車、工場。「彼女」らの身体感覚や感情、記憶が直に伝わってくる。「暴力の泉があるとしたら、山の森の奥のまだ誰も歩いたことのないところにある、黄色い岩から流れる黄色い水のようなものだ」。その文章はどこか映像のようで、目を開けているかぎり、ずっと流れ込んでくる。(たいやき)

(二四〇頁 税込一九八〇円 4月刊)

火明かり ゲド戦記別冊

アーシュラ・K. ルーグウィン 著

井上重／清水真砂子／山田和子／青木由紀子／

室佳信訳 岩波少年文庫



ルーグウィンは、アーシュー世界を発見した、と言う。創造したのではなくて。

日本では「ゲド戦記」の名で知られるこの一連の物語の最終巻、偉大なる発見者であり観察者であった彼女がその最晩年に見つけた最後の物語が表題作「火明かり」だ。ついに邦

訳されたこの短編とともに、彼女の講演会原稿やエッセイがまとめられたのが本書である。

アーシューでは昔話や神話を語るとき、決まってこう始める——むかしむかし、はるかなむかし、セリターはどこにも遠いところにある……。それほどにも遠いさいはての島、セリダー。「火明かり」は、そんなセリダーに残してきた舟《はてみ丸》への追憶から始まる。ベッドに横たわり暖炉の火明かりを眺めているのはかつての大賢人、ゲド。未熟な時代を描く第一巻では追い立てられるように、成熟した第二巻では静かな自信に満ちて、そして魔法使いとしての最盛期、第三巻では若い世代への希望を抱いて、ゲドは《はてみ丸》に乗り、あのセリダーへも、もっとはるか先へも行った。誰よりも遠くまで見てきた彼は今「暖炉の前に座って火を眺めるのはいい気分だろう」と思うも、動く力は残っていない。アーシューの魔法使いは世界の均衡を学ぶ。ことばは沈黙に／光は闇に／生は死の中にこそあるものなれ——。「空想叙事詩」と評された本シリーズは常に生を謳うと同時に死について語ってきた。だから本作では、その後幸せに暮らしたとき、ではなくその死を謳う——朝が来た、《はてみ丸》に風が吹く。うれしやな、いざ、放たれて！(ひるね)

(二五四頁 税込九九〇円 5月刊)

この史代 鳥がとび、 ウサギもはねて、花ゆれて、 走ってこけて、長い道のり

この史代著 青幻舎

小学校の図書館に
所蔵されていた一冊
の本……『夕風の街
桜の国』は、評者が



初めてこの史代に触れた作品だった。歴史
の授業で習ったように、広島に原爆が落とさ
れた事実は知っていた。しかし、この本との
出会いが、今までは他人事だった歴史をより
自分事として感じるきっかけとなった。

代表作『この世界の片隅に』をはじめ、各
作品を書き始めたきっかけや、そこに込めら
れた思いが語られるロングインタビュー、単
行本解題などが収録されている。戦争に関す
る話を、戦争経験のない著者がどのように描
くのか。様々な葛藤を抱えながら、ストーリ
ーを紡いでいった作者の姿がありありと目に
浮かぶ。

彼女の作品のおもしろさは、戦時中や古代
神話、そして一世代前の話など、異なる時代
の話を「日常」という視点から描き出してい
る点である。会ったことのない人と結婚した
夫婦、息子一家と狭いアパートの一室で暮ら

す老人、迷い鳥を引き取った食堂の娘、日常
的に般若心経を意識しながら暮らす女性。
様々な主人公を中心に、今の倫理観では考え
られないような話や、小難しい歴史・宗教的
な話を日常として描く。だからこそ、現代と
のギャップも素直に受け入れて楽しめる。

著者の略年譜や執筆中の写真、原画アンソ
ロジー、そして様々な媒体で掲載されたイン
タビューまで、この史代の漫画家人生三十
年がたっぷり詰まった本書。文章もさること
ながら、各所に散りばめられている挿絵にも
心躍らされる。

(三二二頁 税込三五二〇円 5月刊)

(ブラチ)

言葉のトランジット

グレゴリー・ケズナジャット著

講談社

これを書いている

私はいま、日本では

ない場所まで日本語で

はない言語を勉強し

ている。新しい言語を一から学ぶことは正直

しんどい。そういう時はこういう日本語の本

を読んで逃避したくなる。

著者のグレゴリー・ケズナジャットは米国



生まれ東京在住の作家。デビュー作「鴨川ラ
ンナー」で京都文学賞を受賞し(院生時代は
出町柳に住んでいた)、芥川賞にも何度か
ノミネートされている。本書は彼の初のエッ
セイ集。地元のサウスカロライナ、イラン出
身の父、谷崎潤一郎研究に着手した同志社大
学院時代など、雑多な過去の経験が日本語で
綴られている。ここでは私の経験かと思わず
食らった二つの章に注目してみよう。

まず「マイジャパン症候群」。みんなより
早く来日したので日本を平端に知ったかぶり
周りの外国人と距離を置きたがる人を指す。
彼らは言う。「あなたはなぜ、私の日本にい
るのか」と。俺はお前ら観光客とは違うんだ
ぞという自意識を見透かされて冷や汗が出る。

次に「言葉の出島」。ここで言う出島とは、
カタカナの和製英語のような「日本の一部で
ありながら、同時に外にある」外来語を指す。
実は、この出島は日本語だけの話ではない。
私のいるここでは英語以外にも様々な言語が
飛び交う。目の前にいる人が喋っているのが
英語なのかそうでないのか、パッと聞いたた
けではわからないことも多い。出島は実はあ
ちこちに点在しているのかも、とふと思う。

と、読みながらいろんなことを考えた一冊。
今度は別の言語でもやってみるか……(倉井)

(一二二頁 税込二六五〇円 8月刊)

コンパートメントNo.6

ロサ・リクソム著 末延弘子訳

みずす書房



ソ連崩壊直前のある春。シベリア鉄道はモスクワを発ち東へ向かう。コンパートメントNo.6に乗り合わせたのは、ロシア人の出稼ぎ夫とソ連に留学中のフィンランド人の少女。モンゴル首都ウランバートルまでの長い、長い旅路は、シヨスタコヴィチの『弦楽四重奏曲第八番』とともに動き出す。

恰幅の良いロシア人の男はやたらと饒舌で、感情を高ぶらせたかと思えば悲しげに目を落とし、酒と暴力と女について語り続ける。狭い室内で、フィンランド人の少女は口を固く結んで男を観察し続ける。男は少女に紅茶を淹れ、少女はそれに少し口をつける。

車窓は寒々しい白と濃密な黒を繰り返す。オレンジ色の陽光がその合間に新たな一日の到来を告げる。二人は朝食を食べる。チェスをする。延々と続く社会主義国家の単調な風景と変わらない同室。しかし《すべてが動いている——雪、水、空気、木、雲、風、町、村、人、思いが》。

時折列車は停車する。少女は荒涼とした駅に降り立つ。息の詰まる緊張感からの解放。冷たい空気を吸い込む。

壮大な旅路に似つかわしくない陰鬱な短調の調べで始まったこの旅は、幾度となく緊迫した空気をみせる。列車は大陸を横断する、《平行線の旅》。父から譲り受けたナイフを手放せないまま、男は交わることを何度も求める。平行線は交わらない。だが常に共にあり続けたともいえないか。異質な他者との強制的な密着はやがて終わりを迎える。平行移動は、ここまで。少女は列車を降りる。(ひるね)

(二三四頁 税込三六二〇円 7月刊)

レス・ザン・ウィン

詩について 詩人について 自分について
ヨシフ・プロツキー著 加藤光也ほか訳
みずす書房



一九四〇年、旧ソ連のレニングラード。ユダヤ人を両親として、そこにひとりの子どもが誕生した。のちのノーベル文学賞受賞者、詩人のヨシフ・プロツキーである。社会主義リアリズムとは無縁の詩を書いていたプロツキーは一九六四年、「徒食者」として

逮捕され、一九七二年にはアメリカに亡命する。その後はロシア語で詩を書き続けるとともに英語で多くのエッセイを発表したプロツキーだが、本書は亡命後に書かれた彼の文章をまとめた浩瀚なエッセイ集である。

プロツキーが語るのは、自身の敬愛する詩人について、また自身の過去について。前者に関して、プロツキーはマリーナ・ツヴェターエワやW・H・オードンを取り上げる。ここでは一九四行からなるツヴェターエワの詩と、九九行からなるオードンの詩が一行一行解釈される。その緻密さには思わず「詩を読むとはこういうことだ」と唸ってしまう。また後者に関して、戦後のレニングラードを回想した次の文章はほとんど完璧と言えるのではないか。「灰色やくすんだ緑色の建物の前面は、銃弾や榴散弾で穴だらけになっていた。果てしない空っぽな街路には、行き交う人もほとんどなく、自動車も少なかった。その顔つきはほとんど飢えた者のようで、その結果、目鼻立ちがくっきりとし、より高貴に見えたといってもいいくらいだった」。

本書を読み込むうえで、私には知識も経験も圧倒的に不足している。それくらい本書は手強い。ただひとつ確実にわかるのは、本書は幾多の再読に値するということだ。(ばや)

(五六〇頁 税込七一五〇円 5月刊)

環境思想入門

橋本努編
勁草書房

「自然を大切に」「環境を守ろう」。よく聞くフレーズであり、この下で様々な主張や活動がなされている。素晴らしい事のようにも思えるが、こういうフレーズが独り歩きしているような印象もある。環境に関する考えが十分深まっていなくて、的外れな方向に議論が進み、解決には近づけない。

逃げることでできない環境問題に、正しく向き合わねばならない。そのための教養として環境思想を学んでいこう。本書はオムニバス形式で、哲学、政治学、美学、文学など様々な観点から解説している。ここでは哲学の章を少し紹介しよう。

そもそも自然とは何か。何をもって自然保護というのか。サイエンスライターのエマ・マリスは、人間の関与に依らず自然は変化するという前提の下で、人間と自然の関係と捉えていくべきだと主張する。この考えに基づく、手付かずの「自然」を保存することや、壊されてしまった昔の状態を取り戻すことが

自然保護だという一般的な見解には再考の余地がある。

もっと広く自然を捉えるのだ。自然は森の中にのみ存在するものではない。少し外を歩けば小さな緑地が見つかるだろう。そこには生物が住んでおり、自然が形成されている。広大な緑のイメージとは程遠い。美しいと思えないかもしれない。しかしそれらを愛することから始まるのではないだろうか。《手付かずの自然という幻想を捨てることで、私たちはより多様な自然の存在を認識し、それらを増やして環境を改善できるのだ。》(竹輪)

(二五六頁 税込三三二〇円 7月刊)

君たちの記念碑はどこにある？

カリブ海の《記憶の詩学》

中村達著 柏書房



サントリー学芸賞を受賞した前作『私が諸島である』。著者はそこで「カリブ

海思想」の立場から、西洋思想の、ひいては私たち読者の西洋中心主義を浮き彫りにした。カリブ海にも思想はあるのに「なぜハイデガーでなければならない？ なぜラカンでな

ければならない？」——この問いは痛切に響く。本作は前作と同様、「カリブ海思想」の立場から、西洋思想の西洋中心主義を批判していくが、本作の特徴は「記憶」という視点である。西洋の思想家、たとえばアーレントは、記念碑や偉大な建築物が後世まで残り続けることで、記憶の存続＝歴史は担保されると主張する。しかしだとすれば、西洋が強いた奴隷制や年季奉公制の影響で記念碑を残すことのできなかったカリブ海の人びとは「歴史を持たず、歴史の外側にいることになる」。

そこでカリブ海の人びとは、西洋とは異なる記憶のあり方を模索する。そこで見出されるのが「記念碑や偉大な建築物といった「場」ではなく、風景や人物に刻まれた「痕跡」に目を凝らす方法」である。「フランスの輝かしい国民的記憶から切り離された仏領ギアナの朽ち果てた流刑地、(…)そこに放置された瓦礫、苔生した残骸、(…)壁に刻まれた数字」——カリブ海の記憶はそこに眠る。そして本作は、それらの痕跡に目を凝らし、それらを読み解くことを私たちに求めるのである。「記憶論」が昨今注目を集めているが、ここでの議論がいかに西洋中心的なものであるのか——本作を読むとそれがわかる。

(二五二頁 税込二五三〇円 6月刊) (はや)

神々の構造

印欧語族三分イデオロギー

ジョルジュ・デュメジル著

松村一男訳 講談社学術文庫



「聖性・戦闘性・豊穡性」。印欧語族（インド・イラン人、古イタリヤ人、ゲルマン人、等々）は三つの觀念に從つて世界が構成されているという世界觀を保持していた。この大胆な學說を打ち出したのが比較神話學、言語學の大家デュメジルである。

彼の打ち出した三分イデオロギー（trilogie tripartite）は、冒頭の三つの觀念の表れを神話における神々の機能に見る。例えば、最古期ローマにおける聖性・戦闘性・豊穡性はそれぞれユピテル・マルス・クウイリヌスに対応し、北欧においてはオーディン・トール・フレイに対応する。また三分は祭祀・文學、法制度、哲學、言語など様々な分野にも影響を及ぼしている。例えばローマの詩人プルペルティウスの作品、原初のローマの三部族を描いた詩作にその残滓が窺える。

三分は人類普遍の形式にも見えるが、そうではない。シュメール、エジプト、『旧約聖書』そして儒家や道家の思想にこうした

三分は見られない。注意したいのは、印欧語族においても三分が必ずしも実際の社会の様態と結びついているわけではない、ということだ。文化によって実社会への反映のされ方は異なる。また、三分はあくまで歴史的な一現象であるとして、一般化は避けられる。個々の事例の分析には、確かに疑義を呈したくなるものもある。しかし、デュメジルの學說是比较神話學を語る上で避けては通れない。學說の位置付けを詳しく知りたい方は同じ訳者の著書『神話學入門』（講談社学術文庫）を参照されたい。

（二五六頁 税込一三二〇円 5月刊）（荒砥）

文學と戦争

エーリッヒ・アウエルバッハ著

クリスティアン・リヴォレット編
高田康成／竹蜂義和訳 法政大学出版局

一九三五年、十月十六日。マルブルク大学ロマンス語文獻學主任教授のエーリッヒ・アウエルバッハがその任を解かれ、追放処分を宣告される。ナチスが政權を掌握し、ニュルンベルク法が施行された時期であった。アウエルバッハはトルコへ亡命し、イ

スタンブール大学で教鞭を取ることになる。

この時期の講演や論考などを編集したのが本書である。ここでアウエルバッハは、古代から近代にいたる西欧世界を渉猟し、社会や文化を取り巻くダイナミズムを組織していく。西欧世界で「母語」はいかにして生まれ、国民意識と結びつくようになったのか（十六世紀ヨーロッパにおける國語の成立）、スタンブールやバルザックに見出される近代リアリズムの精髓とは何か（十九世紀ヨーロッパにおけるリアリズム）。また後半部では、「ヨーロッパ文化史を織りなす主要人物」として、ダンテ、マキアヴェッリ、ヴォルテール、モンテスキュー、ルソーらについて、それぞれ仔細な解説を施している。対象は様々であるが、これらは時系列を通して緩やかに絡み合っている。そこに垣間見えるのは、西欧社会における共同体の形成という、きわめてアクチュアルな問題意識である。

評者としては特に、歴史的な社会構造と文藝形態との結びつきを戦争文學という形式に見る表題作と、明快ながら示唆に富む詳細なダンテ解題は是非一読してほしい。『ミメーシス』に結実するトルコ亡命時代の、アウエルバッハの思索の足跡が、きつとここに認められるだろう。

（二九四頁 税込三九六〇円 6月刊）（猫足）

「遅読」のすすめ

齋藤孝著

SBクリエイティブ

速読を否定する本では断じてない。本によって適した読み方があるなかで、「遅読」に焦点を当てている。

遅読とは何か。ただ遅く読むというものではない。《書かれた言葉や著者の息遣いに出会い直す、ゆるやかな旅のような読み方》だと著者はいう。実際に体験しているかのように文字を味わっていくことで、それは経験として自分の中に蓄積されていく。途中、平家物語の「扇の的」が引用されていた。これを見たとき、私の中学生の頃の記憶が蘇ってきた。当時の私は単語を調べて現代語訳し、場面を想像して何度も音読していた。十数年経っても、その欠片が私の中に残っていたのだ。何かとコスパやタイパが優先される時代だが、《時間をふんだんにかけて、深く体験する》。それこそが真のコスパ、タイパになるだろう。後半では遅読に向いているジャンルやおすすめの本がコメント付きでたくさん紹介されている。重厚な古典が並んでいるかと思いきや『サザエさん』もあり、ブックガイドとしても楽しめる。

(竹輪)

(二七二頁 税込二〇四五円 7月刊)

グローバル格差を生きる人びと

「国際協力」のディストピア

友松夕香著 岩波新書

西アフリカ・ガーナ北部では国際ロマンス詐欺に手を染めることが教育を受け英語を習得した若者たちのあいだで「通過儀礼」と化している。教育や農業、ジェンダー支援などの「国際協力」は、雇用を生み出すどころか失業や女性の過重労働を拡大させ、新たな困難を生み出してきた。本書は人びとの生活から、援助の名のもとに生み出される不平等、《国際協力のディストピア》を写し出す。

欧米への不信の背景には、旧宗主国フランスの軍事介入や通貨支配、そして貧困や紛争ばかりを強調する一面的報道がある。こうした描かれ方に反発した人びとは、SNSで発信されるディアスポラや市民の声に耳を傾け、それを自らの経験と重ね合わせて世論を形づくっていく。その延長で、ロシアや中国が「頼れる相手」として支持を集めている。二〇年以上も西アフリカの国々に通い援助の現場を見てきた著者だからこそ、描かれる人びとの声が鮮明に響く。国際協力を「善意の手」としてきた日本社会には、その物語を捉えなおす覚悟が問われている。(たいやき)

(二四〇頁 税込二〇三四円 6月刊)

生命の起源を問う

地球生命の始まり

関根康人著 講談社ブルーバックス新書

アストロバイオロジー（宇宙十生命科学）。「生命の起源」という骨太な謎に対して、著者はこの耳慣れない学問からの応答を試みる。生命と地球をひとつの循環するシステムとして捉える視点がこの学問の大きな魅力だ。

地層も現存していないほど太古の原始地球の物質循環。「何が起きるとその循環の流れに生命という意思を持つ小さな菌が誕生しうるのか」——議論の旅路はDNAの構造から月の歴史、海底の熱水噴出孔の痕跡、そして木星や土星の衛星の地下海にまで。生命Ⅱ自己複製と代謝を作用させるシステムがいかなる条件下で可能になったのかが描かれていく。本書を貫くのは「システムとは何か、システムとはどう生まれ、どう進化するのか」という大局的な視点。物理・化学・生物・地学……とかく蛸壺化しがちな科学知のピースが集まって、四〇億年前の生命の姿がモザイク画のように浮かび上がってくる。未知の世界が解き明かされるこの躍動感とスリルを久しぶりに浴びた。評者がこれまで読んできたブルーバックスのなかで面白さNo.1。(浅煎り)

(二七二頁 税込二二二〇円 7月刊)

絶望の連鎖を絶て——『筐底のエルピス』を語る

古来より《鬼》と呼ばれてきた存在——《殺戮因果連鎖憑依体》。人に取り憑き、殺し合いを駆り立てるそれは、人類の絶滅を目的とする悪意の権化だ。かつて鬼に家族を殺された少女・乾叶は、鬼退治専門の組織《門部》に引き取られ、今宵も街を駆る——。

どうも。本年四月号で『負けヒロインが多すぎる!』を語った綴葉ライトノベル部（部員一名）の水炊きです。第二弾として今回紹介するのは、オキシタケヒロ著／toi8 絵『筐底のエルピス』（ガガガ文庫）。前回とは違ってかわって凄絶な、伝奇小説です。



◆因果の物語／物語の因果

本作は古来『桃太郎』より親しまれる鬼退治の物語だけれども、作中の《鬼》退治は一筋縄でいかない。なんとすれば、鬼は取り憑いていた人間が殺されても、今度は殺した人間へ取り憑くからだ。鬼殺しが、鬼になってしまう——このシステムに対処するための鍵は、『門部』本部の地下深くで遙か未来へと繋がったワームホールが存在である。その未来では、人類が絶滅している。鬼は人類絶滅を目論むゆえに、そこに送り込まれると目的を達成したと認識して消えてしまうのだ。しかし、おわかりだろうか。この鬼退治は矛盾を抱えている。未来で人類が絶滅している以上、鬼に対する人類の敗北は確定されているのだから。

鬼が辿る殺戮の因果。あるいは鬼退治の矛盾した因果。『エルピス』のテーマはすばり「因果」だ。そのストーリーにおいてもまた、さまざまな勢力、それぞれの思惑がぶつかり合いながら、ワームホ

ールが引き起こすタイムパラドックスも相俟って、因果関係が複雑に絡まる。この因果——またの名を、運命——に囚われ、導かれる人間たちの熱く逞しい足掻き。それが本作の魅力である。

◆絶望の果て、掴み取る希望

あらかじめ敗北が決定されたような戦いに、それでもなお、と挑む叶たち。けれども最初に説明したあらすじは、この物語のほんの序の口なのだ。《白鬼》という最悪の鬼が叶の親友に取り憑いたことを皮切りに、本作は想像を絶するところまでゆく。それはわれわれ読者の想像が裏切られるということでもあるが、何より叶たちの想像が——未来への望みが——絶たれる、ということでもある。ゆえに、絶望。これより酷い状況なんてない、と思ったら、さらに底が抜ける。もうやめてくれと読んでいる心がつらくなる展開を容赦なく繰り出す作者こそ、あるいはいちばんの鬼かもしれない。

とはいえ。小説は決して、叶たちをただ虐め抜いているわけではない。物語はむしろ、絶望のなかでかすかに残された希望を手繰り寄せるように進んでゆく——開かれたパンドラの箱、その底に残された最後の希望を掴むために。《世界は無慈悲で、運命は不条理で、死は恐ろしい》。それでも《終わりの瞬間まで》——《今》は続く。そして続いている限り、人は戦える。大切な人のために。たとえ未来が絶望に決定づけられようと、どこまでも尊いこの《今》を、継続するために。そのための強さ、人間の意志自体が、希望だ。

シリーズは現在八巻まで刊行され、次巻で完結予定だという。追いつくには良い機会だ。各巻、ライトノベルとしては破格なほど質量ともにハードだけれど、読む手はきつと止まらない。（水炊き）

ジェンダーの今——変わらないもの、変わったもの

“女は、人間として自律した自由な存在であるにもかかわらず、男たちから自分を「他者」として受け入れるように強いられる世界の中で自分を発見し選択しなければならぬのだ。”

この言葉はボーヴォワールの『第二の性』（河出文庫）より、「事実と神話」という副題が付された第一巻の序文にあたる。「男は主体であり、女は「他者」である」という、根の深い神話。一九四九年の初版以来、フェミニズムの古典として七五年にわたって読み継がれ、一昨年には新訳決定版が復刊した——男性による女性の抑圧の構造を見抜いたボーヴォワールの卓見に驚かされることに、それだけ長い間変わらないこの性支配の構造に嘆息を禁じ得ない。

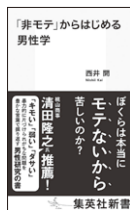


かくして、現在。日本のジェンダー・ギャップ指数が先進諸国のなかでも最下位レベルなのはもはや周知の事実だろう（京大もまた例外ではない）。だが、「女性議員が当選しないのは女性の能力が低い結果なのでは？」と訝しむ方には一歩立ち止まってもらいたい。

石橋湛山賞を受賞した三浦まりの『さらば、男性政治』（岩波新書）は、政界に潜むホモソーシャルな性支配に切り込んだ。政治という社会の中枢には、個人の能力や素質に還元できない構造的な問題が蔓延っている。それは女性に対する抑圧であるとともに、男性自身の首も締める側面も持っていないだろうか（日傘を差さないという男の「強さ」は一体何を守ってくれるのか）。男性政治に別れを告げるべきは、むしろ男性自身なのかもしれない。

こうした時代のなかで当の男性は何ができるのか。ボーヴォワールが「人は女に生まれない。女になるのだ」と語ったように、男性もまた「男になる」可変的な存在である。

西井開の『「非モテ」からはじめる男性学』（集英社新書）は、恋愛指南書でもモテたいという願望を否定するものでもない。男性の感情を豊かな言葉で掘り起こす社会的考察の書だ。分析の核となるのは「男性集団内の権力性を背景とした周縁化作用」。例えば身体の特徴などをからかわれる経験は男としての疎外感・劣等感へと結びつく。ゆえに彼女ささえてきれば「普通」のハードルを越えられるのではないかと一発逆転を図るが、失敗してまた孤立と自己否定が進む……というプロセスを指す。



その背景に潜むのは、社会関係や孤立をめぐる種々の苦しみがある。「非モテ」という言葉に集約されてしまい、負の自己ラベリングが加速する構造である。「非モテ」という経験を起点に男性たちの加害／被害を解きほぐしていく本書は、過剰な自己否定に陥るでもなくバックラッシュに突き進むでもなく、少しでもマシな形で「男」をやっていく道の参照点となりうるかと私は思っている。

願わくは、ここで取り上げた書籍が誰の目にも留められないほど陳腐で「当たり前」になる社会が訪れてほしい。時代遅れの遺物として書架の奥底へと押し込まれ、二度と日の目を見ないでほしい。この文章もまた、早いところ書かれた理由を失ってほしい。一人の男性として、切に願う。

（浅煎り）

編集後記

京大作家インタビューはお楽しみいただけましたでしょうか？ 個人的な話をする、私は「京都をあんまり美化したくない」という言葉が印象に残りました。〈成瀬〉シリーズに登場する“実家が北白川”の学生ではないですが、実は私も京都市内で生まれ育ち、実家から通学しています。とはいっても、「京都」と聞いて多くの人の頭に浮かぶイメージとはかけ離れた、閑静な住宅街です。

京都出身と言うと、なぜか「いいな〜」と返ってきます。私からすると下宿生の方が思う存分「京都」を享受しているうらやましかったです。日が暮れた左京区を自転車であ走する学生を横目に、ひとり電車で帰るときのせつなさといったら。大学の外で京大生と名乗るときも、世間に流布している「京大生」を期待されて困る瞬間がありました。物語の中の美しい「京都」に気圧されて、自分の方が偽物なんちゃうかな、と思ったりして。

そんな折に成瀬あかりが京都で過ごす日々を垣間見て、宮島先生の言葉を聞いて、私の生きる京都も京大も、私にとっては本物なんだと肯定できた気がします。大学で過ごす時間も残りわずかとなりましたが、「黒髪の乙女」が見つからなくなったり、成瀬とともに京都を極められそうです。（くたくた）

当てよう！ 図書カード

今月号の特集は京大作家インタビュー。ということで、京大（旧制第三高校）出身の作家に関する問題です。梶井基次郎の小説『檸檬』のラストシーン。主人公はある書店に入り、本を積み上げ、その上に一つの檸檬を載せて出て行きます。どの書店でしょうか。

1. 紀伊国屋書店
2. 丸善
3. 未来屋書店
4. 有隣堂

（竹輪）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは10月15日です。



《6月号の解答》 6月号の問題の正解は、1. の金沢城でした。兼六園と併せ北陸の観光地として名高い金沢城ですが、天守は1602年に火災で消失して以降、現在まで再建されないうまとなってしています。図書カードの当選者は、絡まる解くさん、307さん、トルコライスさん、いぐあらしさん、えび天天さんの5名です。当選おめでとうございます。（荒砥）

読者がらひひひ

○六月の特集は、めずらしく俳句や詩を土地の関係性からとりあげていて、とてもよかったです。

（職員・いいみよん）

—— ありがとうございます！ 俳句や詩集の書評はたびたび取り上げられますが、こうして土地という統一されたテーマで取り上げることがするのは紙幅の広い特集ならではすね。私事ですが、先日前橋を訪れました。前橋といえば萩原明太郎、久しぶりに本棚の奥の『青猫』を引っ張り出してみました。

○酷暑が続きますね。暑さを吹き飛ばす清涼感のある本、夏だからこそ読みたい本、暑い時にこそ読みたい本などのおすすみがあると嬉しいですね。もともと本の虫ですがお休みは外せず読書三昧するのが体にやさしい時代になりましたね。

（防災研・ノリウツギ）

—— 今年の夏も本当に暑いですね。夏らしい本、ということで最初に思い浮かんだのは森谷明子『南風吹く』（光文社文庫）という小説です。俳句甲子園を目指す高校生の青春小説。清涼感という意味では、ピッタリかもしれません。この「綴葉」10月号が発行される頃には気温も下がって、秋の訪れを感じられているといいのですが。

（荒砥）